

帰国報告

オランダ・アムステルダム日本人学校の3年間 ～現地教育事情等オランダから学ぶ～

前 アムステルダム日本人学校 教諭
現 稚内市立潮見が丘中学校 教諭 吉川貴志

0. はじめに

2008年4月、日本最北端の街・稚内市を離れ、オランダのアムステルダム日本人学校へ赴任。在外教育施設派遣教員のひとりとして、2011年3月までの3年間勤務しました。

はじめての海外生活、はじめての在外校勤務から得られたものは、自分にとって、そして、これから出会うであろう数多くの児童生徒・保護者の方々にとって、有意義でかけがえのないものとなることでしょう。

今日、教育現場を取り巻く環境が厳しさを増す一方、どんなときでも、どんな環境でも、児童生徒はもちろん保護者の方々そして地域社会において、有意義な学校、教師でありたいと思いつけている私にとって、国内の現場を離れ、日本を外からみることで、全国各地より派遣された力ある教師集団の中で、勤務した経験は大きな財産となりました。



1. オランダの概要

■ 国名

オランダ王国

Koninkrijk der Nederlanden

(コーニンクレイク・デル・ネーデルランデン)

英語表記

Kingdom of the Netherlands

通称 **Nederland** “ネーデルランド”

“ネーデルランド”とは「低い土地」を意味する

俗称 **Holland** “ホーランド”

スポーツなどの応援のかけ声も
“Holland”である。

日本語表記 オランダ王国。通称オランダ。
漢字による当て字で、和蘭、和蘭陀、阿蘭陀と表記され、蘭と略される。

オランダは、他国で思想・信条を理由として迫害された人々を受け入れることで繁栄してきたという自負があるため、何ごとに対しても寛容であることが最大の特徴といえます。

とりわけ、日本にとっては、徳川幕府による鎖国政策に際し、キリスト教の布教活動禁止という条件に欧州諸国で唯一寛容に応じ、長崎の出島を介した貿易を通じ、欧州の近代文明を蘭学という形で江戸時代に日本にもたらした史実は、明治維新後の日本が急速な近代化政策に成功するうえで不可欠な恩恵となった。

現在でも他の欧州諸国に比して実に多くの移民が、その暮し易さのために、合法・非合法を問わず在住している。合法的に入国を果たしたEU域外からの移民については、オランダ語講習、社会化講習、就職相談をセットにした、いわゆる「市民化講習」の実施を、他のヨーロッパ諸国に先駆けて行うなど、一定の移民対策も講じています。

■面積

41,864平方キロメートル

九州とほぼ同じ、欧州でも比較的小さな国。最高地点（海拔322.5m）は、マーストリヒト市にある Drielandenpunt と呼ばれオランダ・ドイツ・ベルギーの3国を分かつ国境地点。



オランダの景観で顕著なのは、山や起伏が無く、どこまでも続く平坦な土地と国中に張り巡らされた運河と言えるでしょう。

国土の4分の1が海拔0m以下にあり、昔から風車を利用して水をくみ上げ、それを運河に流して土地を干拓してきました。

このため、運河の堤が土地より高く積まれ、水面は土地よりも高くなっているところもたくさんあります。

「世界は神が創り賜うたが、
オランダはオランダ人が造った」

■位置

ヨーロッパの西部に位置し、北海道・稚内市よりも更に北、樺太（サハリン）と同じ緯度にある国です。

東はドイツ、南はベルギーと国境を接し、北と西は北海に面する。海外領土としてカリブ海に6つの島を有する。（オランダ領アンティル）

高緯度にある国のため、夏と冬の日照時間の差が大きい。日本との時差は8時間。

1月の日の出は8:42。朝起きて、出勤する頃に明るくなっているのは3月から9月頃までで10月の日の出は8:05。冬場の出勤は真夜中に出かけているという感じがするぐらい真っ暗な中、学校へ向かいます。

一方、日の入りは、6月で22:02。サマータイムを実施している期間は、子どもが寝る時間となっても、昼間と変わらぬ明るさです。

■人口

1,653万人（2009年オランダ中央統計局）
日本の約8分の1。東京都よりも少ない。

■首都

アムステルダム

政治の中心は、王宮や国会があるデン・ハーグ。デン・ハーグは、「国際法の首都」と呼ばれ、国際司法裁判所、国際刑事裁判所、化学兵器禁止機関など国際社会の安定に貢献する多くの国際機関が置かれています。

2009年2月、国際司法裁判所の所長に就任されたのは、皇太子妃・雅子様のお父様である、小和田恆（おわだひさし）氏です。

■言語

オランダ語が公用語ですが、大人のほとんどの人が英語を流暢に話せます。

オランダ語は、英語とドイツ語の中間にあるような言語とも言われるため、オランダ人は英語やドイツ語に堪能な人が多いことでも知られています。

テレビで放送される映画などもオランダ語の字幕がついているものも多くみられます。

私たちが普段使っている日本語のなかにも、オランダ語が元になっているものがあります。

例えば…ビール (bier)、オルゴール (orgel)、おてんば (ontembaar)、ランドセル (ransel)、ポン酢 (pons: 柑橘類) などはオランダ語の音をそのまま真似たもので、病院、盲腸、炭酸などはオランダ語の意味を漢字に転換したものです。



W杯2010決勝のパブリックビューイング会場

■元首

ベアトリックス女王

1980年4月30日～現在に至る

1938年生まれ（73歳）

毎年4月30日は「女王の日」。

前ユリアナ女王の誕生日で祭日。オランダ中がオラニエ王家の色、オレンジ色に染まります。

アムステルダムでも誰もが路上で好きなものを販売でき、街全体がフリーマーケットとなり、多くの人で賑わいます。オランダ人がとても楽しみにしている祝日です。

ベアトリックス女王の誕生日は1月ですが、自らの意志で、前ユリアナ女王の誕生日である、この日のまま「女王の日」が続いています。



2. 日本との関係

2000年に日蘭交流400周年。2008年に日蘭外交関係開設150周年を迎えました。2009年には通商400周年を迎え、両国において様々な周年事業が実施されました。



■日本との交流の始まり

日本とオランダの交流は大航海時代にさかのぼります。当時、欧州諸国は金、銀、香辛料などを求め新大陸の発見に力を注いでいました。

1598年、5隻のオランダ船がモルッカ諸島と日本を目指し、ロッテルダム港を出港。船団は、南米やアジアに広がるポルトガルとスペインの拠点を襲撃する任務も負っていたため、大砲や鉄砲で武装していましたが、4隻は外国船に襲われるなどし、1隻のみが航行を続けました。その1隻デ・リーフデ（博愛）号が1600年、臼杵湾（大分）に漂着ここから日本とオランダの交流が始まりました。

■朱印船貿易

江戸幕府の初代将軍徳川家康は、漂着したオランダ船に興味を持ち、乗組員のヤン・ヨーステンらを心から歓迎。幕府相談役の地位を与え、航海術を学んだり、西洋諸国に関する情報を集めたりしました。

1609年、幕府から発行された朱印状に基づき、平戸（長崎）にオランダ商館が設置され、本格的な通商関係が始まりました。

ちなみに、東京駅がある「八重洲」の一带は、ヤン・ヨーステンの屋敷があったことに由来し、「ヤ ヨース」がなまったものです。

■鎖国時代も続いた交流

1637年の島原の乱をきっかけに、幕府はキリスト教（カトリック系）の弾圧を本格化し、鎖国に踏み切ります。

しかし、プロテスタント系のオランダ人は布教を目的としていなかったため、その後も200年以上にわたって日本が交流する唯一の西洋国となります。

これにより、日本ではオランダ語で西洋の学問を研究する「蘭学」が発展し、西洋ではシーボルトらによって日本の社会や文化が紹介されました。

開国後の1858年、オランダと修好通商条約を締結し、正式な外交関係を樹立することになります。





日蘭交流の各種イベントのラスト、クロージ
ングイベントに招待され、開会に先立ち、中学部の
生徒が「南中ソーラン」を披露しました

■オランダから伝わった

治水・灌漑技術

長年の交流を通じて、オランダから日本に伝
えられたものはたくさんあります。その一つが
治水・灌漑技術です。

国土の4分の1が海拔0m以下にあるオラン
ダは、高い水工技術を持っており、スエズ運河
やパナマ運河の建設にも活用されました。

日本に招かれた土木技術者達は、洪水が頻繁
に起こっていた河川などで堤防建設や護岸工事
を行うなどし、国内のインフラ整備に大きく貢
献しました。



毎年小学部4年
生がスケート教
室後リンク近く
の墓地に立ち寄
りお墓参りを行
っています

ファン・ドールン

土木技術者で、1872年2月に来日し
た明治時代のお雇い外国人。

約8年間にわたって日本で河川・港湾の
整備計画を立て、携わった事業には、大き
な成果を上げた安積疏水などがあります。

■進出企業

オランダに進出している日系法人数396社
(2009年10月)

日本に進出している蘭系法人数は82社

(2009年2月)

■在留邦人数

6,616人(2009年10月外務省統計)

*在日オランダ人数

2,100人(2009年法務省統計)

■訪問者数

日本からオランダ 99,300人

(2009年日本政府観光局)

オランダから日本 31,186人

(2009年日本政府観光局)

日蘭関係は、4世紀にわたる長い交流の歴史、
良好な経済関係、オランダ王室と我が国皇室との
緊密な交流等、全体として良好な関係を維持して
います。

大航海時代、世界初の多国籍企業「オランダ東
インド会社」を設立したオランダは、現在もユニ
リーバ、ハイネケン、フィリップスなど多くの多
国籍企業が活躍しています。

また、海外企業が投資しやすいよう、税制面の
優遇制度も整えられており、多くの多国籍企業や、
ローリングストーンズ、U2といった有名アーテ
ィストが節税のため籍を置いている。



全土に整備されている自転車道。交通手段と
してのシェア約3割。人口1人あたりの自転
車台数は世界一と言われます。

3. オランダの教育事情

■教育の自由

『設立の自由』

一定数以上の生徒の就学を確保できれば市民団体でも学校設置可。

『理念の自由』

宗教的・非宗教的な教育理念による教育実践可。

『教育方法の自由』

教材や教科書・学級編成なども自由に選択できる。

現実には様々なクリアしなければならない課題もあるが、以上3つの自由が憲法で保障され、さらに公立と同じ国庫補助金が受けられ、校舎も市から支給されます。

この憲法の改定が1917年のことですから日本から見れば驚きの一言です。

義務教育は5歳～16歳で授業料は無料。PTA会費的な出費のみの負担。

高等教育では、奨学金により授業料をまかなえる事が多く、親の財力に関係なく教育を受けることが出来ます。

4分の3は私立。公立も私立も国の援助は一緒。通学区域などの規則もありません。



任期中、年に数回現地校を視察する機会があり貴重な学びの場となりました。

「教育の自由」が保障されているオランダでは、思想や教育方針等によって、たくさんの種類の学校があります。学校や教師自身が何をどう教えるかを決定します。

したがって、教科書も様々な内容をもっています。最近の傾向として、中学や高校で、文部省が以前よりも「統一化」に乗り出しているのは事実です。

しかし、それが意図しているのは、「インフォメーション時代の到来」と「グローバリゼーション」の流れの中で、子供たちが自主的な勉強によってそれに応じる力をつけることです。

子供たちは、非常に多種多様な情報から自ら選び取り、それを自主的に消化していかねばなりません。したがって、オランダの文部省が推奨しているのは、今までのように教師が教室の前に立って授業をするという古典的な様式ではなく、もっと個別に、生徒のより大きな自主性を尊重して指導する、ということです。

文部省は一般的な目標や教科ごとの主要目標を示してはいますが、それ以上に内容や方法に制限を与える事はしません。



■初等教育（4歳から12歳）

義務教育は5歳からですが4歳から通学できます。以前は幼稚園と小学校は別だったが、現在は「幼稚園から小学校への移行をスムーズにするため」に統合され8年制となっている。

「入園式・入学式」「卒園式・卒業式」といったものはなく、誕生日を過ぎると入園できるため、就学開始時期はそれぞれです。

教育の重点は「感情・知性・創造性の発達」「社会的・文化的・身体的能力の育成」

政府が立てた「子どもに最低限これだけは教える」といった規定はあるが、各学校は、それぞれに教育方針を決めて教授法を開発するなど特色を出しています。カリキュラムの自由さと同様に、始業時間や長期休みの取り方なども学校によります。

しかし、夏休みが始まる日だけは別で、国が3つに分けて開始日をずらしています。理由は、オランダ中の学校が一斉に夏休みになると、バカンスに出かける時期が重なり、交通渋滞などで混乱に陥るからだそうです。

親にとって学校選びはとても重要で、学校にとっても生徒が集まらなければ廃校に追いやられるので、各校ではオープンデーを実施し、「本校では、こんな教育をおこなっています」というように懸命にPRしなければ行けません。

■全国共通学力テスト（CITO）

初等教育の最終学年＝8年生（日本の小学6年生）に行われます。2月のはじめ頃に3日間かけて行われます。

オランダ語・算数・学習スキル・ワールドオリエンテーション（地理・歴史）・物理・生物・市民科・宗教運動の各教科で学んだ知識の応用が試されます。

シトテストの結果と日頃の成績をもとに、本人・保護者・教師の三者で話し合い、次の進路を決めます。

日本との大きな違いは、初等教育を終えたこの年齢で大きく3つの進路に分かれるということです。

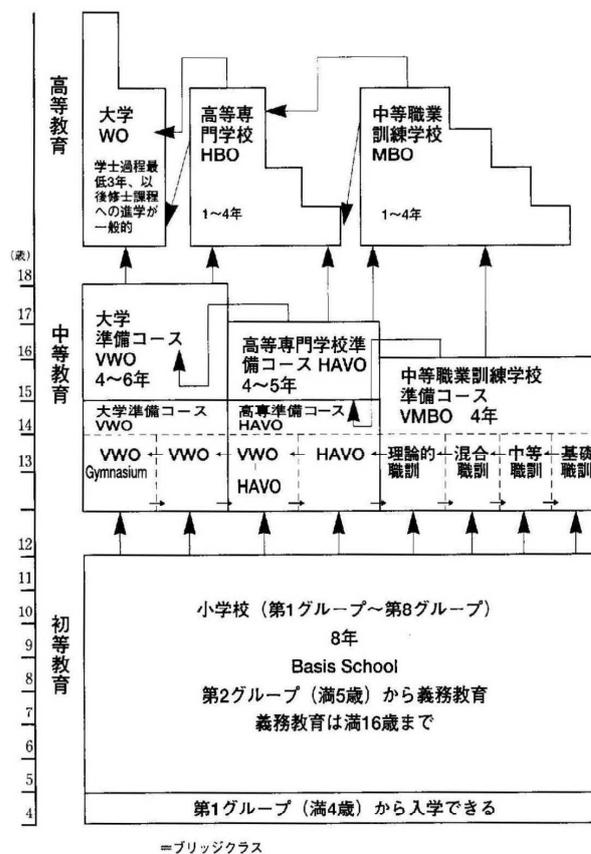
■中等教育

中等教育へ入学後2年は、ブリッジクラスといって、進路変更が可能なシステムになっています。VWOとHAVOが一緒になった学校も多いです。

中等教育では、いずれの学校も全国共通の卒業認定国家試験があります。この試験に合格すると、上の学校を自由に選び、進学できるシステム。

日本と違い入試制度ではありません。卒業資格がある＝上の学校への入学条件となります。

人気の大学や学部、現在では医学部などが人気で、そのような学校では定員オーバーとなっています。そのような場合は「抽選」により入学者を決めます。優秀な学生でも抽選に外れれば入学できません。最近では、抽選方法も工夫され、成績優秀者ほど当選確率があがると言ったシステムにかわってきているところもあります。



4. アムステルダム日本人学校

■教育目標

児童生徒一人一人の可能性を伸ばし、明るい未来を創り出す国際人としての基盤を培い、オランダに生きる規律ある児童生徒を育成する。

■校訓

強く
明るく
豊かに



■目指す教育

日本人学校としての役割

- ・日本国内の学校と同一水準ないしはそれ以上の教育内容を保証する。
- ・児童生徒が帰国後も学習面や学校生活において不安がないようにする。
- ・日本人としてのアイデンティティを培う。
(伝統文化への理解、知識・教養)
- ・国際性を養い、国際社会で活躍できる人材を育成する。

保護者・日本人社会の期待

- ・児童生徒の安全・安心が第一に確保・保証された学校
- ・一人一人の子ども（我が子）が大切にされているという実感が伴う学校
- ・学習の質・量ともに国内の公立学校以上のものを保証する。
- ・基礎基本を確実に身につけさせるとともに、個に応じたきめ細かい指導をする。
- ・語学力（とくに英会話）の充実を図る。
- ・生徒指導、生活習慣の指導や教育相談、とりわけ進路相談の充実を図る。
- ・オランダにいるからこそ出来る体験を重視した活動を学習に取り入れる。

■めざす児童生徒像

『学びとる児童生徒』

『思いやる児童生徒』

『やりぬく児童生徒』

■児童生徒数（平成20年度～22年度）

		H20		H21		H22	
		4月	1月	4月	1月	4月	1月
小学部	1	44	46	29	26	33	33
	2	35	39	41	32	23	22
	3	33	30	39	37	34	33
	4	35	31	30	26	34	34
	5	43	37	27	22	25	19
	6	32	31	38	27	18	18
	計	222		204		167	
中学部	1	21	18	27	25	25	23
	2	15	7	15	11	23	22
	3	13	10	5	5	9	8
	計	49		47		57	
合計	271		251		224		
家庭数	189		176		153		

*小学部は、H22年度6学年以外は各学年2クラス。

*中学部は、各学年1クラス

*1月の数字は、3学期始業式の在籍数。

■特色ある教育活動

○オランダ語

小学部1年から6年で、1コマ30分のモジュールで各クラスを2つに分けた少人数授業。



○英会話

小学部1年から中学部3年で実施。

低学年はクラスごとで、小学4年生からは各クラスを3つに分けての少人数授業。



○現地校との交流教育

小学部3年から5年は来校&訪問。小学部6年は、来校&訪問にプラスして、相互にホームステイを実施。先生方の家にも宿泊したり、させて頂いたりします。

中学部では2年生が来校&訪問で実施。1年生も新しく交流して頂ける学校が見つかり、今後継続していく可能性が広がっています。



左の写真は「ドラマ」と言われる自己表現力を高める目的で行われるとても良い授業。日本人は苦手かな…。



○林間学校

本校には、修学旅行はなく、小学部は4～6年生で実施、中学部は全員が参加して実施するこの2泊3日の林間学校が唯一の宿泊的行事。



これは中学部林間学習の一コマ。カヌーも自転車もかなりハードですが楽しい思い出となります。開催地は小中とも2カ所を隔年で訪れます。宿泊はユースホステルを利用。

○日本人合同運動会

毎年6月、本校を会場にオランダ中の日本人が参加し盛大に実施される伝統行事。

本校とロッテルダム日本人学校が隔年で主管校となり運動会を運営。補習校5校の児童生徒、現地校に通う子ども達など総勢2000人が参加して行われる。写真は、本校全校児童生徒による「南中ソーラン+よさこい」。



日蘭交流400周年の運動会では佐渡ヶ嶽部屋の親方や力士の方々も参加。

○校外学習

在外校の利を生かしたのものから、日本国内同様の社会科見学的なものまで、小中各学年で多種多様な校外学習を実施しています。

昨年度から中学部では、日系企業各位のご協力によりキャリア教育の一環として「職場体験学習」を実施。初年度から充実した取り組みとなり今後の継続、発展が期待されるところです。



小学部校外学習



中学部職場体験学習



○その他

夏は「水泳教室」、冬は「スケート教室」を、現地のスポーツクラブにて、オランダ人コーチによる指導で3日ずつ実施。

「もちつき」「書き初め」「百人一首大会」など日本の伝統文化にふれる機会などもカリキュラムに位置づけています。

また、中学部では、毎年1月に岩手県山田町の使節団が、オランダでのホームステイの日程の最後に本校を訪問し、中学部の生徒達と交流してくれます。日本の中学生との貴重なふれあいの場です。



5. 付録

3年間のオランダでの生活では、たくさんの「面白い!」や「不思議?」「素晴らしい!」「すごい!」に出会いました。

文化や習慣の違いから様々な「驚き」に出会う3年間でした。

オランダ人はとても寛容で親しみやすい人が多く、とても住みやすい国でした。

また、オランダに限らずヨーロッパの人々は、子ども達にとっても優しく、我が家の子ども達にとっても安心して過ごすことが出来た3年間でした。



運河に架かる「跳ね橋」! オランダには色んなタイプの橋があります。



オランダでは学校を卒業すると家に国旗と一諸にリュックなどカバンが飾られます。



スケートをしています。しかし滑ってるのは…「運河」なんです。毎年滑れるわけではなく、冷え込みが厳しい年だけ可能になります。



市民憩いの公園にある桜。桜祭りには本校の児童が参加。休日には花見に繰り出す人々も。



毎春全土で開催の「歩け歩け大会」コース図に従って4日間ただただ歩きます。



オランダと言えば「チーズ」アルクマールの「チーズ市」は観光名所にもなっています。

6. 派遣教員として

赴任1・2年目は、中学部2年の学級担任、3年目は、担任をはずれ、中学部副主任として勤務させて頂きました。

赴任1年目から、「帰国」というゴールが見えている短い派遣期間の中で、自分に何が出来なのか、この学校に何を残せるのか、とやることを意識して生活してきました。

派遣教員の入れ替わりが激しい中で、これまでの財産にあぐらをかき、様々な事をやり過ぎて帰国することだけは避けよう。新しい風を吹かせ、少しでも本校の教育活動が前に進んでいくよう、力を発揮しようと常に考え、アグレッシブに活動してきました。

全国各地から集まってこられた力ある先生方、日本はもちろんヨーロッパ各国など様々な国から赴任された保護者の方々、そして個性豊かな児童・生徒達。異国の地で暮らす同じ日本人としてお付き合いのあった方々など、全ての出会いがとても貴重で、多くの示唆を与えてくれました。

3年間のオランダでの仕事、生活、子育てなど、全ての事をこれからの人生のエネルギーに変え、頑張っていきたいと思います。

